

アリストテレス『天について』第一巻第十章

279b4 以上のことは確定されたので、次に世界は不生のものであるのか、生じうるものなのか、不滅のものであるのか、滅びうるものなのかを論ずることにしよう。そのため、まず他のひとびとの見解を一通り見ておこう。反対の見解のいずれか一方を論証することは、他方について困難を明らかにすることだからである。同時に、互いに争っている論の論拠をあらかじめ聞いておこなら、いまから語られようとしていることも信頼性が増すであろう。欠席裁判で裁くのはわれわれにふさわしいことではないであろうから。真実を正しく判断しようとする人は、論争の当事者ではなく審判者でなければならないのである。

279b12 さて、すべてのひとが世界は生じたものであると主張しているが、生じたあとについては、あるひとびとは永遠であると、あるひとびとは自然において存在している他のものと同じように滅びうると、またある人は、交互に、あるときはいまあるのと同じものとして、あるときは滅びていまとは別のものとしてあり、このようにしていつまでも続くと主張する。これはアクラガスのエンペドクレスやエペソスのヘラクレイトスの見解である。

279b17 生じたにもかかわらず、永遠であると主張するのは不可能な見解である。多くの場合に、あるいはすべての場合に、その通りであるのを目撃することのみが合理的な見解とすることができるのであるが、いまの見解については正反対のことが起こるからである。というのは、生じたものがすべて滅ぶことは明白だからである。

279b22 さらに、現にあるあり方の始まりをもたず、以前のすべての時代にわたって別のあり方をしていることが不可能なものは、変化することも不可能である。何か原因があることになるが、この原因が以前にも含まれていたのであれば、別のあり方の不可能なものが別のあり方の可能であることになる。コスモスが、以前には別のあり方をしていたものから成立したのであれば、永遠にそのようなあり方をしており別のあり方が不可能であったのなら、生ずることはなかったであろう。もし生じたのであれば、かのものは別のあり方が可能であり、永遠にそのようなあり方をしていたのではないことは明白であり、したがって以前にも成立して分解し、分解しては成立したのであって、このようなことが無限回起こったか、起こることが可能だった。もしそうであるとすれば、コスモスは不滅ではないことになる。いつか別のあり方をしていたとしても、あるいは別のあり方が可能だったとしても。

279b31 あるひとびとが、世界は不滅であるが生じたものであるという自分たちの主張に与えている援助も真ではない。彼らは、図形を描くひと同じような意味で、自分たちも生成について語ったのであって、世界がいつか生成したということと言おうとしているのではなく、図形が描かれるのを見るひとのように、教えるため、よりよく理解されるように言っているのである、と言う。しかしこれは、すでに述べたように、同じことではない。図形を書く場合は、すべてが書かれるなら、[書かれたのと]同じものが結果として生ずる。しかし、彼らの説明の場合は、結果として生ずるものが同じではないどころか、そもそも不可能である。なぜなら、先に[前提として]認められることと後から[帰結として]認

められることが正反対だからである。というのも、彼らは無秩序からいつか秩序あるものが生じたと主張しているのであるが、同じものが同時に無秩序であり秩序あることは不可能であり、別々の生成、別々の時間でなければならない。しかし図形の場合、時間において別ではない。世界が同時に永遠であり生成することが不可能であることは明らかである。

280a11 交互に、集合したり分離したりすることは、宇宙が永遠であるが形を変えるとすることと異ならない。ちょうど誰かが子供から大人が、大人から子供ができるのを、あるときは滅びることであり、あるときは存在することであると考えのと同じことである。構成要素が互いに集まったとき、そのつどそのつどの秩序と構成が生ずるのではなく、同じ秩序が生ずるのであり、とりわけこの論を語っているひとびとの主張によれば、そうである。かれらは、両方の状態を反対であるとしているのだから。したがって、物体全体が連続的であり、あるときは一方の状態に、あるときは他方の状態にあり、秩序づけられているのであれば、全体としての構成物がコスモスであり世界であって、コスモスが生じたり滅びたりするのではなく、コスモスの状態が生じたり滅びたりすることになる。

280a23 その全体が生じたところのものが滅び、ふたたびその逆はないというのは、世界が一つであるなら、不可能である。生成する前は、世界に先立つ構成物がずっと存在していたのであり、そのようなものなしには変化はありえないというのがわれわれの主張である。世界は無限にあるとするほうがまだ可能性がある。

280a27 しかし、これが不可能なのか可能なのかは、後に述べることから明らかになるであろう。不生であるが滅びることとか、生じたものであるが不滅にとどまることが可能であると考えたひとびともいるからである。たとえば『ティマイオス』で語られているように。そこでは、世界は生じたものであるが、以後は永遠のときにわたってあるだろうと言っている。彼らに対して、世界について、自然学的な観点からのみ語られたが、全体にわたって一般的に考察すれば、この問題についても明らかとなるであろう。

第十一章

280b1 まず第一に、どのような意味で不生である、生じうる、滅びうる、不滅であるとわれわれは言うのか区別しなければならない。これらは多くの仕方で語られるからであり、たとえ議論のためには異なるところはないとしても、さまざまに区別されるものを区別なしに用いるなら、考えを定めることができないのは必然である。語られていることが、どのような仕方で世界に起こるのか明らかでないからである。

280b6 不生は、一つの仕方では、以前にはなかったものが、生成も変化もないのに、いまあるとき言われる。あるひとびとが接触することとか動かされることがそうだと言っているように。というのも、彼らは接触するときも、動かされるときも、生ずるのではないと主張しているからである。また一つの仕方では、生ずることや生じていることが可能であ

るものが、ないときに言われる。このものはまた、生ずることが可能なので不生とも言われる。また一つの仕方では、そもそも生ずることが不可能であり、したがってあるときはあるがあるときはないということも不可能であるようなものが言われる。——不可能は二通りに言われる。ひとつは生ずるであろうと言うことが真ではないときに言われる。もうひとつは、容易に、ただちには、また立派な仕方では生じないときに言われる。

280b14 同じように、「生じうる」も、ひとつの仕方では以前になかったものが後にはあるなら、生じた場合であれ、生ずることはなく、あるときはないが、ふたたびある場合であれ、言われる。また一つの仕方では、可能であるなら、可能であることが真に規定された意味であろうと、容易にという意味であろうと、生じうると言われる。また一つの仕方では、ないものからあるものへの生成があるとき、すでに生成を通してあるときでも、まだないがあることが可能なときでも、生じうると言われる。

280b20 滅びうるや不滅であるも、同じことである。何か以前にはあったが、後にはないか、ないことが可能であるなら、いつか滅びたり変化したりするのでであろうとなかろうと、「滅びうる」とわれわれは言う。また滅びることによってないことが可能なものを滅びうるということもある。さらに、容易に滅びるものを滅びうるということもあるが、これは滅びやすいということもできよう。

280b25 不滅についても同じである。滅びることなく、あるときはあるがあるときはないもの、たとえば接触のようなものが、不滅と言われるが、それは滅びることなく以前にあったものが後にはないからである。また、現にあってないことが不可能なものや、いまはあるがいつかないであろうものが不滅と言われる。きみはいまあるし、接触もいまある。しかし、どちらも滅びうる。いつかきみはあると言うのが真ではないときがあるであろうし、これらは接触していると言うのが真ではないときがあるであろうから。しかし、第一義的には、あって、滅びることは不可能で、いまあって後にはないとか、ないことがありうるということのないものが不滅と言われる。容易に滅びないものも不滅と言われる。

281a1 以上の通りであるとすると、どのような仕方でも可能、不可能とわれわれは言うのかを考察しなければならない。もっとも主導的に不滅といわれるのは、滅びることが不可能であることによってであり、あるときはあるが、あるときはないことがないときである。不生と言われるのも、生成することが不可能なもの、生成することができず、以前にはなかったが後にはあるといったことのないものである。たとえば対角線が通約可能であるということのように。

以上のことが明確になったので、続く問題を論じなければならない。もし何かがあることもないことも可能であるなら、ある時間とない時間の、最大限が確定されなくてはならない。わたしが言うのは、ことがらがあることが可能な時間とないことが可能な時間のことであり、どのようなカテゴリーについても、すなわち人間、白い、三ペーキユスなどについても同じことである。そのが一定量ではなく、そのつど差し出されたのより大きな時間があり、それよりは小さいという限度がないのであれば、同じものが無限の時間にわたってあることが可能であり、また別の無限の時間にわたってないことも可能であることになろう。しかしこれは不可能である。

281b2 次のことから始めよう。不可能と偽とは同じことを表示しているのではない。不可能と可能、偽と真とはひとつには前提による。わたしが言うのは、たとえば、もしこれこれであれば、三角形は二直角をもたないとか、対角線は通約可能であるといった場合である。また無条件に可能、不可能、偽、真であることもある。しかし、何かが無条件に偽であることと、無条件に不可能であることとは同じではない。君が立っているときに、君は立っていないと言うことは偽ではあるが不可能ではない。同じように、キタラを弾いているが歌ってはいないとき、歌っているということは偽であるが不可能ではない。しかし、同時に立っているし座っていること、対角線が通約可能であることは、偽であるだけでなく、不可能でもある。じっさい、偽なることを前提とすることと、不可能なことを前提することとは同じではない。不可能な前提から生ずるのは不可能な帰結である。

281b15 ところで座っていることと立っていることとの可能性（力）は同時にもつ。一方をもっているときには他方ももっているからである。しかしだからといって、座っていると同時に立っていることにはならず、それぞれ別のときに、座り、立っている。しかしもし何かが無限の時間にわたって、複数のことの可能性（力）をもっているなら、それは別の時間においてではなく、同時にである。したがって、何かが無限の時間にわたってありつつ、滅びうるものであれば、ないことの力をもっていることになる。もし無限の時間にわたってあるのであれば、それが可能性（力）をもっている「ないこと」が実現するとしよう。とすると、同時に現実にあるとともに現実でないことになる。偽なることが前提されたから、偽なることが帰結するのであろう。もし不可能でなかったなら、帰結も不可能ではなかったはずである。したがって常にあるものはすべて無条件に不滅である。

281b25 同じように、不生である。もし生じうるものであれば、何らかの時間にわたってないことが可能であることになる。以前にはあったがいまはないもの、あるいは後のいつかにないことが可能なものは滅びうるものだからである。これに対し、以前にないことが可

能なものは生じうるものである。ところが常にあるものは、そこにおいてないことが可能であるような時間は、無限な時間にしても有限な時間にしても、ない。無限な時間においてあることが可能であったなら、有限な時間においてもあることが可能であろうから。

281b32 とすれば、同じひとつのものが、同時に常にあることが可能であるとともに、常になんことが可能であることは不可能である。しかも、この否定も不可能である。わたしが言うのは、常にはないことである。とすれば、何かが常にあり、滅びうるものであることは不可能である。

© Sumio Nakagawa